

氏 名	服部 圭祐
学 位 の 種 類	博士（文学）
学位記の番号	乙第80号
学位授与年月日	2021（令和3）年2月18日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	和辻哲郎の「倫理学」体系における独創性の探究 —「間柄の倫理学」の現代的継承の試み—
論文審査委員	主査 田中久文 （相関文化論専攻 教授） 副査 朴 倍暎 （相関文化論専攻 教授） 奥波一秀 （相関文化論専攻 教授） 飯嶋裕治 （九州大学 准教授） 竹内整一 （東京大学 名誉教授）

論 文 の 内 容 の 要 旨

【序論】

本稿の目的は、近代日本を代表する倫理学者、和辻哲郎(M22-S35/1889-1960)の提唱した倫理学説—いわゆる「和辻倫理学」—を、唯一無二の「和辻倫理学」たらしめている独創性を把握するとともに、それを今日の倫理学研究に継承する可能性を探ることにある。本稿はこの目的を達成するために、三つの考察—(1)「和辻倫理学」の独創性を解明する、(2)過去の「和辻倫理学」研究を批判的に概観する、(3)当該学説の独創性を継承する方途を探る—を遂行するが、「序論」においてこれらの考察は、それぞれが三つの作業を通じて遂行されるべきものとして明らかにされる。それゆえ、本稿の「本論」は、この三つの考察に含まれる三つの作業に対応する九つの章から構成されるが、行論の都合上、その内の一つの章を第2章と第9章に分けているため、全十章構成を取るものとなる（第一の考察は第1章・第6章・第8章に、第二の考察は第4章・第5章・第7章に、第三の考察は第1章・第2章・第9章・第10章に充当される）。

【本論】

【第1章. 「和辻倫理学」以前の倫理学研究】

第1章では、近代日本に倫理学という学問が生まれてから、和辻哲郎の「倫理学」が登場するまでの歴史を、大きく三つの時期—明治中期の「倫 - 理学」、後期の「規範学」、大正期の「人生哲学」—に分けて概観するとともに、若き日の和辻の研究が第三期「人生哲学」に属することを確認する。この作業は、大正期までの日本の倫理学研究が「学問」そのものの社会性を問題化せず、西洋のEthicsに対応する学問として行われるに止まっていることを浮き彫りとする。この特徴は、和辻の初期の研究にも同様にみられるが、一方

で彼は「哲学」を人間社会の歴史的・風土的発展の中で形成される「文化」の一部分として把握する、という後の「倫理学」へ繋がる議論を発展させてもいる。

〔第2章. 「和辻倫理学」と同時代の研究〕

第2章では、日本倫理学史の第四の時期「人間存在論」における思索の内容を、和辻哲郎と同時期に活躍した「京都学派」の学者—①三木清・②九鬼周造・③田辺元—の論考に即して確認する。これによって、①三木の「人間学」において「学問」が「人間存在」の一形態として捉えられていること、②九鬼の「形而上学」において「人間存在」が「無」との対立関係に即して分析されていること、③田辺の「種の論理」において「個人」「社会」の相互否定的統一として「人間存在」が論じられていること、が明らかとなる。しかしながら、このことは昭和初期における「京都学派」の研究が「人間存在」の分析という共通の課題に取り組む一方、必ずしもそれを「倫理学」としては行っていない事実をも闡明せざるをえない。

〔第3章. 和辻哲郎の「倫理学」体系〕

第3章では、和辻哲郎が自身の倫理学説を一つの「体系的な叙述」として提示した『人間の学としての倫理学』(S9/1934)と『倫理学』全三巻(S12-24/1937-1949)の内容を概観する。この作業は、和辻の「倫理学」の「体系」としての構成を、それが三つの議論—①「序論」・②「本論」・③「序論」「本論」を併せた全体の議論—からなっていることとして照明する。即ち、「序論」は彼のいう「倫理学」の有様の解明に、「本論」は「人間存在」を成立させる構造としての「倫理」の分析に、それぞれ充てられているが、これらの議論を通じて彼は、現実の様々な「人間存在」を「倫理」との関係において捉え直すことで、それらを不断に実現され続けるべき「当為」として描き出すのである。

〔第4章. 現在までの「和辻倫理学」研究の三つの類型〕

第4章では、従来の「和辻倫理学」研究の歴史を、代表的な三人の研究者—①戸坂潤・②金子武蔵・③湯浅泰雄—によって示された「和辻倫理学」理解の確認を通じて概観する。彼らの理解はそれぞれ「和辻倫理学」を、当該学説を構成する三つの議論—①「序論」・②「本論」・③全体の議論—を中心として把握する結果、それを①種々の事象を「倫理」の所産として解釈する「解釈学」として、②「人間存在」の構造を分析する「存在論」として、③日本社会を「倫理」的なものとして称揚する「日本論」として、捉えるものとなっている。本稿は、彼らの理解を従来の「和辻倫理学」理解の三類型—①「解釈学的理解」②「存在論的理解」③「思想家的理解」—の代表的形態として把握することで、現在までの「和辻倫理学」研究史を、これらの三つの類型の分化過程として描き出す。

〔第5章. 従来の「和辻倫理学」研究の諸問題〕

第5章では、第4章で確認した「和辻倫理学」理解の三類型が、「和辻倫理学」をその一要素たる「解釈学」「存在論」「日本論」としての性格において捉えるに止まり、その「倫理学」的性格を見失っていることを指摘する。これらの各類型は、「和辻倫理学」において①現実世界の諸事象が「人間存在」の表現として「解釈」される、②「倫理」を「人間存在」の構造として規定される、③現実の社会が「倫理」の実現として捉えられる、という特徴があることに注目するが、そうした個々の論点を直接に「倫理学」の本質的特徴とみなしてしまう。そのことは、それらの議論を通じて展開される「倫理学」としての本旨を見失い、却ってそれらの個々の論点の主旨をも取り違える結果をもたらさざるをえな

い。

〔第6章. 「和辻倫理学」の独創性と問題点〕

第6章では、和辻の倫理学説の独創性と問題点を、それが前述の「体系的な叙述」—①「倫理学」・②「倫理」・③「当為」の分析を行う三つの議論からなる—として展開されている点に即して解明する。この作業は、当該学説において①「序論」が「倫理学」自体を「人間存在」の一形態として「倫理学」的に分析する試みとなっていること、②「本論」で「倫理」が「存在」「人間」「当為」という三つの事象を成立させる構造として描出されていること、③これらの考察を通じて「日常的事実」としての「人と人との間柄」が「当為」の場所として論じられていること、を指摘する。これによって当該学説の独創性は、この三つの議論を通じて一つの「倫理学」という学問的実践を遂行している点に求められるが、このことは同時に、当該学説が①「倫理学」を「人倫」（人間共同態）の学という意味での「人間の学」と混同する、②「倫理」を「人間共同態」—「個人」「社会」の二重存在—の構造に矮小化する、③「当為」を「人と人との間柄」を形成する「個人」のそれに限定する、という問題点を有していることをも闡明する。

〔第7章. 「和辻倫理学」研究の歴史とその超克〕

第7章では、第6章で提示した本稿の「和辻倫理学」理解が、過去の「和辻倫理学」研究でばらばらに取り扱われてきた三つの議論—①「倫理学」論・②「倫理」論・③「当為」論—を「倫理学」を構成する三要素として捉え直すことで、それらの研究の問題点を補っていることを指摘する。それに際して本稿は、現在において「日本哲学的理解」とも呼ばれるべき「和辻倫理学」理解の第四の類型—当該学説を「日本哲学」の一種とみなす—が研究の主流をなしていることを見るが、この類型は当該学説を過去の「哲学」説の一種として規定するに止まり、それを今日において継承されるべき独創性を持つものとして論じえない、という欠点を有している。これに対して本稿の理解は、当該学説の「倫理学」的性格にその独創性を求める点で、それと区別されるべき第五の類型「倫理学的理解」として定立される。

〔第8章. 「倫理学」体系の成立過程〕

第8章では、和辻の「倫理学」体系の独創性・問題点が醸成された原因を、『人間の学としての倫理学』(S9/1934)とその前身となる論文「倫理学」(S6/1931)の比較を通じて追究する。この作業は、前著において①「倫理の学」としての「倫理学」の規定が導入されていること、②この構想に即して「倫理学」の分析自体が一つの「倫理学」的思索として再構成されていること、③「倫理」を「人間存在」において自己を実現する「絶対的否定性」として捉える発想が現れていること、を明らかにする。このことは、当該著作が過去の古い枠組み—「倫理学」を「人間共同態」の構造の分析としての「人間の学」とみなす—に代わる、新しい「倫理の学」としての「倫理学」の構想を樹立する一方で、それを過去の「人間の学」の構想と明確に区別しないまま展開することで、自身の「倫理学」の主旨を曖昧化していることを焙り出す。

〔第9章. 「和辻倫理学」の倫理学的意義〕

第9章では、和辻の「倫理学」が、日本倫理学研究の第四期「人間存在論」の思索を包括的に展開するものとなっている点を指摘する。ここにおいて彼の倫理学説が「倫理学」として展開されたことは、①三木の「人間学」をより徹底する形で「学問」を日常的な「実

践」として遂行していること、②九鬼の「形而上学」で論じられた「人間存在」と「無」（「空」）の関係を「倫理」の一側面として捉えることを通じて、「人間存在」の分析を「倫理」の分析として置き直していること、③田辺の「種の論理」よりも具体的に「人間存在」の有様を一「個」「全体」的存在の無数の重層として一把握していること、を示すものと解される。これによって彼の「倫理学」の独創性は、当時の「人間存在論」の思索を一つの「倫理学」体系として展開した—その結果、それまでEthicsに対応する学問の一科として行われていた日本の倫理学研究に革新をもたらした—ことと表裏一体をなすと知られるが、これは当該学説の問題点が、この「人間存在論」の立場を徹底せず、過去の「人格主義」の立場を残存させていることに由来する事実を示している。

【第10章. 現代における「倫理学」の継承と発展】

第10章では、今日における我々の倫理学研究が、和辻の「倫理学」の独創性を—その問題点を克服しつつ—継承するものとなるための方途を探る。ここまでの「本論」の考察は、「和辻倫理学」の問題点がその「倫理学」の構想の不徹底に求められることを解明してきたが、そのことは当該学説の問題点を乗り越えるために、彼の「倫理学」の構想をより徹底する形で展開する必要があることを示している。それゆえ、本稿は「倫理学」における①「倫理学」論を「倫理学」論・「倫理」論・「当為」論からなる体系的実践たる「倫理学」の分析として、②「倫理」論を「人間」の構造・「存在」の構造・「当為」の構造の統一たる「倫理」の解明として、③「当為」論を「倫理学」論・「倫理」論から独立した第三の考察として、それぞれ再構成することを、当該学説の独創性を継承しつつ、その独創性の十全な発揮を妨げる問題点を打破した、新しい「倫理学」の研究を行うための方策として提示する。

【結語】

本稿の考察は、「和辻倫理学」の独創性を解明すると同時に、それを発展的に継承する新しい「倫理学」の可能性を提起するものとなった。こうした新しい「倫理学」観は、今後の研究において①「和辻倫理学」を彼の業績に見られるもう二つの基軸的論点「倫理思想史」「国民道德論」との関連に即して捉え直すこと、②和辻の「倫理学」を昭和初期の「人間存在論」の他の方向—九鬼の「文芸論」や田辺の「論理学」—と対比的に把握し直すこと、第三に日本の倫理学研究を初等・中等教育における「道德教育」や「教育学」との関係の下に置き直すこと、などの展望を開く。なぜなら、「倫理学」を「人間存在」の一形態として捉える和辻の「倫理学」観を継承することは、「倫理学」を他の「存在」（学問・活動）との関わりにおいて成立する「間柄」的存在として把握することを意味するからである。

論文審査結果の要旨

I 論文の概要

本論文は、近代日本を代表する倫理学者、和辻哲郎(1889-1960)の提唱した倫理学説（いわゆる「和辻倫理学」）の独創性がどこにあるかを把握するとともに、それを今日の倫理学研究に継承する可能性を探究しようとするものである。この目的を達成するために、三つの考察—(1)「和辻倫理学」の独創性を解明する、(2)過去の「和辻倫理学」研究を批判的に概観する、(3)「和辻倫理学」の独創性を継承する方途を探る—を中心に議論が展開されている。

本論文は、「序論」、10の章、及び「結語」からなっており、その概要は下記の通りである。

まず、「序論」において、本論文の目的が上記の三つの考察を通じて遂行されることが説明される。

次に、「第1章 「和辻倫理学」以前の倫理学研究」では、近代日本に「倫理学」という学問が生まれてから、「和辻倫理学」が登場するまでの歴史を、大きく三つの時期—明治中期の「倫理学」の時期、後期の「規範学」の時期、大正期の「人生哲学」の時期—に分けて概観するとともに、若き日の和辻の仕事が第三期の「人生哲学」の時期に属することを確認する。ただし、一方で和辻は哲学というものを人間社会の歴史的・風土的発展の中で形成される「文化」の一部分として把握しようという後の「和辻倫理学」へ繋がる議論も展開している点が注目されている。

「第2章 「和辻倫理学」と同時代の研究」では、「和辻倫理学」が日本倫理学史の第四の時期に当たる「人間存在論」に属するものであることを明らかにしようとする。この時期の特徴を解明するために、和辻と同時期に活躍した「京都学派」の学者—①三木清、②九鬼周造、③田辺元一の論考の意義が確認される。その結果、①三木の「人間学」においては、「学問」が「人間存在」の一形態として捉えられていること、②九鬼の「形而上学」においては、「人間存在」が「無」との対立関係に即して分析されていること、③田辺の「種の論理」においては、「個人」「社会」の相互否定的統一として「人間存在」が論じられていること、が明らかとなる。しかし、同時に、これら昭和初期における「京都学派」が、「人間存在」の分析という共通の課題に取り組みながらも、和辻のように「倫理学」としては結実しなかったことも明らかにされる。

「第3章 和辻哲郎の「倫理学」体系」では、和辻哲郎が自身の倫理学説を一つの「体系的な叙述」として提示した、『人間の学としての倫理学』(1934)と『倫理学』全三巻(1937-1949)の内容を分析している。服部氏によれば、それらは、①「倫理学」、②「倫理」、③「当為」の三つの議論からなっている。具体的にいうと、①「倫理学」という営み自体を「人間存在」の一形態として「倫理学」的に分析する試み、②「倫理」を「存在」「人間」「当為」という三つの事象から成る「人間存在」を成立させる構造として捉えること、③これらの考察を通じて、現実の様々な「人間存在」を「倫理」との関係において捉え、「日常的事実」としての「人と人との間柄」が、不断に実現され続けるべき「当為」の場所であることを論じること、である。

「第4章 現在までの「和辻倫理学」研究の三つの類型」では、従来の「和辻倫理学」研究の歴史を、代表的な三人の研究者—①戸坂潤、②金子武蔵、③湯浅泰雄—によって概観する。①戸坂潤は、種々の事象を「倫理」の所産として解釈する「解釈学」として、②金子武蔵は、「人間存在」の構造を分析する「存在論」として、③湯浅泰雄は日本社会を

「倫理」的なものとして称揚する「日本論」として、それぞれ「和辻倫理学」を解釈しているとする。服部氏によれば、彼らの理解は「和辻倫理学」の上記の三つの契機、すなわち①「倫理学」、②「倫理」、③「当為」にそれぞれ対応するものであるという。

「第5章 従来の「和辻倫理学」研究の諸問題」では、第4章で紹介された三者の「和辻倫理学」研究が改めて批判される。これらの研究は、「和辻倫理学」をその一要素たる「解釈学」、「存在論」、「日本論」としての性格において捉えるに止まり、それがもつ本質的な「倫理学」的性格を見失っていると服部氏は指摘する。

「第6章 「和辻倫理学」の独創性と問題点」では、議論が再び「和辻倫理学」そのものに戻り、「和辻倫理学」の独創性と同時にその問題点が指摘される。服部氏によれば、「和辻倫理学」の独創性は、三つの議論—①「倫理学」、②「倫理」、③「当為」—を通じて一つ「倫理学」という学問的实践を遂行している点に求められるのであるが、しかし、同時にそれぞれにおいて問題点も抱えていると服部氏は指摘する。それは具体的にいえば、①「倫理学」を「人倫」（人間共同態）の学という意味での「人間の学」と混同しかねないこと、②「倫理」を「人間共同態」—「個人」「社会」の二重存在—の構造に矮小化しかねないこと、③「当為」を「人と人との間柄」を形成する「個人」のそれに限定しかねないこと、という諸点である。

「第7章 「和辻倫理学」研究の歴史とその超克」では、第4章で紹介した「和辻倫理学」研究の三つの類型に続いて、現在においては、「日本哲学的理解」とも呼ばれるべき「和辻倫理学」理解の第四の類型—「和辻倫理学」を「日本哲学」の一種とみなすもの—が研究の主流をなしていることが指摘される。しかし、この第四の類型は「和辻倫理学」を過去の「哲学」説の一種と規定するに止まり、それを今日において継承されるべき独創性を持つものとして論じえないという欠点を有していると批判する。それに対して本論文は、過去の「和辻倫理学」研究ではばらばらに取り扱われてきた三つの議論—①「倫理学」論、②「倫理」論、③「当為」論—を「倫理学」を構成する三つの契機として捉え直すことで、これまでの研究の問題点を補っており、第五の類型「倫理学的理解」として定立されると服部氏は主張する。

「第8章 「倫理学」体系の成立過程」では、和辻の「倫理学」体系の独創性と同時にその問題点が醸成された原因を、『人間の学としての倫理学』（1934）とその前身となる論文「倫理学」（1931）との比較を通じて追究する。この作業によって、『人間の学としての倫理学』においては、1. 「倫理の学」としての「倫理学」の規定が導入されていること、2. この構想に即して「倫理学」の分析自体が一つの「倫理学」的思索として再構成されていること、3. 「倫理」を「人間存在」において自己を実現する「絶対的否定性」として捉える発想が現れていること、が明らかにされる。このことは、『人間の学としての倫理学』が、論文「倫理学」にみられる過去の古い枠組み—「倫理学」を「人間共同態」の構造の分析としての「人間の学」とみなす考え方に代わる、新しい「倫理の学」としての「倫理学」の構想を樹立したことを意味している。しかし、その一方で、それを過去の「人間の学」の構想と明確に区別しないまま展開していることによって、自身の「倫理学」の構想の独自性を曖昧にし、そこから問題点も生じていることが指摘される。

「第9章 「和辻倫理学」の倫理学的意義」では、「和辻倫理学」が、第2章で触れた日本倫理学研究の第四期「人間存在論」の思索を包括的に展開するものとなっているこ

とが確認される。すなわち、1. 三木の「人間学」をより徹底する形で「学問」を日常的な「実践」として遂行していること、2. 九鬼の「形而上学」で論じられた「人間存在」と「無」（「空」）の関係を、「倫理」の一側面として捉えることを通じて、「人間存在」の分析を「倫理」の分析として置き直していること、3. 田辺の「種の論理」よりも具体的に「人間存在」の有様を一「個」「全体」的存在の無数の重層として一把握していること、が指摘される。これによって「和辻倫理学」の独創性は、当時の「人間存在論」の思索を一つの「倫理学」体系として展開し、その結果、それまでEthicsに対応する学問の一種として行われていた日本の倫理学研究に革新をもたらしたことにあることが明らかとなる。しかし、「和辻倫理学」の問題点は、この「人間存在論」の立場を徹底させず、過去の「人格主義」の立場を残存させていることにあるということも指摘されている。

「第10章 現代における「倫理学」の継承と発展」では、今日における我々の倫理学研究が、和辻の「倫理学」の独創性を一その問題点を克服しつつ一継承するものとなるための方途を探る。その上で、その問題点を乗り越えるために、「和辻倫理学」の構想をより徹底する形で展開する必要があることを主張する。

最後に、「結語」において、本論文の成果を踏まえて、「和辻倫理学」を発展的に継承する新しい「倫理学」の可能性が具体的に提起される。新しい「倫理学」とは、1. 「和辻倫理学」を彼の業績に見られるもう二つの基軸的論点「倫理思想史」「国民道德論」との関連において捉え直すこと、2. 和辻の「倫理学」を昭和初期の「人間存在論」の他の方向―九鬼の「文芸論」や田辺の「論理学」―と対比的に把握し直すこと、3. 日本の倫理学研究は、初等・中等教育における「道德教育」や「教育学」との関係のもとに置き直すことなどによって拓かれるとする。なぜなら、「倫理学」を「人間存在」の一形態として捉える「和辻倫理学」を継承するためには、「倫理学」を他の「存在」（学問・活動）との関わりにおいて成立する「間柄」的存在の学として把握し直さなければならないからであると主張して服部氏は本論文を締めくくる。

II 審査結果報告

多方面で活躍した和辻哲郎の業績のなかでも、倫理学関係の哲学的著作に絞って粘り強い思索を展開した大変スケールの大きな論文であるという点で全員の高い評価が得られた。

特に「和辻倫理学」を、①「倫理学」論、②「倫理」論、③「当為」論という三つの論の絡み合いとして分析したことは、「和辻倫理学」の本質に切り込み、その特質を浮き彫りにするものであったとされた。①については、「倫理学」自体を「人間存在」の一形態と位置付けることによって、「倫理学」というものを一学問分野としてのそれを越えた、人間にとって普遍的な営みとして理解しようとしている点は斬新である。②については、「倫理」を「存在」「人間」「当為」という三つの事象から成る「人間存在」を成立させる構造として捉えることによって、「倫理」という概念の新たな捉え直しに成功している。③については、これまで「和辻倫理学」が「事実」と「当為」との区別が不明確であるとされてきたのに対して、「和辻倫理学」における独自の「当為」概念を析出したことが評価できる。

また、「和辻倫理学」の本質を解明する上で、従来の和辻研究を振り返り、戸坂潤、金子武蔵、湯浅泰雄による三種の和辻論を体系的に批判している点は、研究史というものへ

の新たなアプローチの仕方を切り拓くものといえる。さらに、「和辻倫理学」と同時代の京都学派の三木清、九鬼周造、田辺元の「人間存在論」との比較は、「和辻倫理学」が生成した思想的基盤を明らかにした点で貴重な研究といえる。

ただし、こうした評価を前提にしながらも、いくつかの問題点も指摘された。叙述の一部に繰り返しがみられる点など、章立てを含めた論述の全体的な構成に更なる工夫が必要である。「独創性」という言葉が不用意に使われているところがあり、その点もう少し細かい注意が必要であった。方法論や体系性に対する思いが強く、図式がやや独り歩きしている印象をうけるところがある。服部氏の考える「あるべき」和辻像と実際に実証的に取り出すことのできる和辻像とがやや乖離しているところがみられる。さらにいえば、和辻について語りつつも、その背後に服部氏自身の考える「服部倫理学」なるものが隠されているように感じられるが、むしろそれを前面に出した上で論を進めた方が分かりやすかったのではないか。「和辻倫理学」の問題点を指摘し、それを発展的に継承する新しい「倫理学」を提起している部分に関しては、さらに詳細な議論を期待したい。思想史的観点からみた場合、「和辻倫理学」と江戸時代の伊藤仁斎の儒学との共通性などがこれまでしばしば指摘されてきたが、そうした近代以前の伝統思想との関係についても少し触れて欲しかった。等々の指摘がなされた。しかし、これらの問題点は、博士論文としての価値を基本的に損なうものではないとされた。

以上の審査結果を踏まえて、本委員会は全員一致で、本論文が博士論文としての水準を十分に有するものであると評価し、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものとの結論に達した。

以上